

新システムと旧システムとの違いについて

佐藤, 賢二
九州大学情報処理教育センター

<https://doi.org/10.15017/6770640>

出版情報：情報処理教育広報. 15 (1), pp.50-55, 1992-07. 九州大学情報処理教育センター
バージョン：
権利関係：



新システムと旧システムとの違いについて

¹佐藤 賢二

1. はじめに

情報処理教育センターの教育用計算機システムは、平成4年4月1日からFACOM M-770/6 を中心とする新システムに移行した。新システムのホスト計算機やパソコンは旧システムの後継機種なので、OS のコマンドなどの基本的な部分はほとんど変わらない。しかし、機器構成の変更や提供ソフトウェアの変更により、使い方が変わった機能や使えなくなった機能もある。本稿ではこのような機能について解説する。

2. ホスト計算機

- (1) 以下のソフトウェアは廃止された。FLIST,MLIST および EDIT/FSO については、PFD と PFD/E に代替機能がある。UTILISP と ATF/LE については、それぞれ LISP と J-TeX に代替機能がある。

DOCK/FORTRAN (フルスクリーンデバッグ)
APL (言語)
BASIC (言語)
UTILISP (言語)
GPSS/X (離散型シミュレーション)
SLCS IV (連続型シミュレーション)
ATF/LE (英論文編集・清書システム)
FLIST, MLIST
EDIT/FSO

- (2) 以下のソフトウェアは製品体系が変わり、移行あるいは統合された。利用者側から見た使い方の変化はない。

GSF(図形処理支援ユーティリティ) → VMH
ISER(電子メッセージライブラリ) → AF-II
TSS/UTY(TSS ユティリティコマンド) → TSS/E
EGRET/DRAW(対話型線画作成システム) → GDP/EX

- (3) DSPRINT は APS に移行したことによりコマンドが変わった。代表的なコマンドの使用法を以下に示す。

i) PRTRFILE コマンド

a) 機能

データセットを印刷する。OPR への出力に加えて、パソコンのローカルプリンタ (FMLBP112) への出力もできる。

b) コマンド形式 (小文字は省略可能部分。[] で囲まれたオペランドは省略可。)

¹九州大学情報処理教育センター

コマンド	オペランド
PRTFILE	File(ファイル名) Ddname(アクセス名) Terminal(ライタ名) [Line(整数 1: 整数 2)] [COPIes(複写回数)] [SHeetsize(A3 A4 A5 A6 B4 B5 LTR)] [PPrintmode(PORT LAND LP ZOOM LZOOM PZOOM)]

c) オペランドの説明

- File(ファイル名) | Ddname(アクセス名)
出力対象となる入力データのファイル名またはアクセス名を指定する。
- Terminal(ライタ名)
出力する装置を指定する。OPR に出力する場合は CPR1、CPR2、FPR1 のいずれかを指定する。ローカルプリンタに出力する場合は、自分が使っているパソコンの端末 ID の後に P を付けた名前を指定する (例: AB01P)。
- [Line(整数 1: 整数 2)]
出力したい行範囲を指定する。但し、0 ≤ 整数 1 ≤ 整数 2 ≤ 999999 である。省略すると、全ての行を出力する。
- [COPIes(複写回数)]
複写回数を 1 ～ 255 の範囲で指定する。省略値は 1。
- [SHeetsize(A3 | A4 | A5 | A6 | B4 | B5 | LTR)]
用紙サイズを指定する。但し、指定が有効かどうかは装置の種類に依存する。
- [PPrintmode(PORT | LAND | LP | ZOOM | LZOOM | PZOOM)]
印刷の方向や縮小などのモードを指定する。PORT はポートレート、LAND はランドスケープ、LP はラインプリンタ、ZOOM と LZOOM はランドスケープで 80% 縮小、PZOOM はポートレートで 80% 縮小。

d) 使用例

- データセット EXAMPLE.FORT77 をオープン端末室の OPR(CPR1) に出力する。
READY
PRTFILE F(EXAMPLE.FORT77) T(CPR1)
READY
- データセット EXAMPLE.FORT77 を講義室のローカルプリンタに 2 部出力する。ログオンするのに使っているパソコンの端末 ID は AB01 とする。
READY
PRTFILE F(EXAMPLE.FORT77) T(AB01P) COP(2)
READY

ii) INFWTR コマンド

a) 機能

出力装置の情報を表示する。

b) コマンド形式

コマンド	オペランド
INFWTR	* ライタ名

c) オペランドの説明

- *
出力装置すべての情報を表示する。
- ライタ名
特定の出力装置の情報だけを表示する。

d) 使用例

- オープン端末室の OPR(CPR1) の情報だけを表示する。
READY
INFWTR CPR1
READY

iii) INFPREQ コマンド

a) 機能

出力依頼の情報を表示する。

b) コマンド形式

コマンド	オペランド
INFPREQ	[Code(要求番号)] [Name(要求名)] [User [(利用者識別名)] ALLUSER] [Terminal(ライタ名)]

c) オペランドの説明

- [Code(要求番号)]
指定した要求番号を持つ出力依頼の情報だけを表示する。
- [Name(要求名)]
指定した要求名を持つ出力依頼の情報だけを表示する。
- [User [(利用者識別名)] | ALLUSER]
指定した利用者識別名を持つ出力依頼の情報だけを表示する。このオペランドを省略した場合は、User(自分の利用者識別名) と指定した場合と等しくなる。
- [Terminal(ライタ名)]
指定した出力装置への出力依頼の情報だけを表示する。

d) 使用例

- 自分がオープン端末室の OPR(CPR1) へ依頼した出力の情報だけを表示する。

READY
 INFPREQ T(CPR1)
 READY

iv) DLTPREQ コマンド

a) 機能

出力依頼を取り消す。

b) コマンド形式

コマンド	オペランド
DLTPREQ	[Code(要求番号)] [Name(要求名)] [User [(利用者識別名)] ALLUSER] [Terminal(ライタ名)]

c) オペランドの説明

- [Code(要求番号)]
指定した要求番号を持つ出力依頼だけを取り消す。
- [Name(要求名)]
指定した要求名を持つ出力依頼だけを取り消す。
- [User [(利用者識別名)] | ALLUSER]
指定した利用者識別名を持つ出力依頼だけを取り消す。このオペランドを省略した場合は、User(自分の利用者識別名)と指定した場合と等しくなる。
- [Terminal(ライタ名)]
指定した出力装置への出力依頼だけを取り消す。

d) 使用例

- 自分がオープン端末室の OPR(CPR1) へ依頼した出力をすべて取り消す。

READY
 DLTPREQ T(CPR1)
 READY

(4) 以下のソフトウェアはインストールしていないが、要求があればインストールする。

- ADJUST/IPE(対話型パタンエディタ)
- PL/I(言語)

(5) 六本松地区と病院地区では、オフィスプリンタが使用できなくなった。テキストは APS の PRTRFILE コマンドを使えば FMLBP112 に出力できる。

(6) パソコンからホスト計算機を使っている時の日本語フロントエンドプロセッサは、以前は ATOK だったが、端末エミュレータとの相性が悪いため、現在は OAK を使用するようになっている。

- (7) 旧システムのホスト計算機で使用できたコマンドのうち、現在までに障害が判明しているものを表1に示す。

コマンド名	備考
Edit	フルスクリーンオプションがない。
SeaRch	RACF がレベルアップした影響で、以前のような使い方ができなくなった。
DSPRINT	DSPRINT コマンドはなくなった。
DSPOPER	DSPRINT コマンドと同様に、DSPOPER コマンドもなくなった。
OPR	OPR には出力できるが、FMLBP112 に出力できない。
STINGY	OPR には出力できるが、FMLBP112 に出力できない。
FList	FList コマンドはなくなった。
MList	MList コマンドはなくなった。
GRAPHMAN	OPR への出力がうまくいかない。
FIMPORT	FIMPORT コマンドを使うためには、center コマンドでなく、center2 コマンドを使ってホスト計算機に接続する必要がある。
FEXPORT	FIMPORT コマンドを使うためには、center コマンドでなく、center2 コマンドを使ってホスト計算機に接続する必要がある。
TDSP	新システムの端末 ID に対応していないので、端末室別の情報が出せない。 TDSP ALL とすれば一応全端末の情報を見ることができる。

表 1: ホスト計算機のコマンド

3. パソコン

六本松地区端局端末室 A(特2教室)には旧システムのパソコンがある。ここでは、ホスト計算機に接続できないことを除けば、旧システムとほとんど同様のソフトウェアが使用できる。以下ではセンター内の講義室とオープン端末室、六本松地区端局端末室 B(130 番教室)、文系地区端局端末室、病院地区端局端末室および農学部端局端末室のパソコンの使用方法について、旧システムにおける使用方法との違いを解説する。

- (1) ホスト計算機が停止している時間にパソコンを使いたい場合、以前はライセンスファイルが必要であったが、現在はライセンスファイルが不要になった。これに対応して、ライセンスファイルを作成する LCF コマンドもなくなった。
- (2) 入力する課題番号とパスワードは、以前は大文字で入力していたが、英小文字に変わった。
- (3) FMR で使用できるソフトウェアが変わった。新システムで使用可能なソフトウェアは表3の通り(端末室内の一部の FMR でのみ使用可能な場合は、台数を書いている)。インストール作業の都合上、この表では使えない筈のソフトウェアが実際には使えることもあるが、いずれは使えなくなる予定である。
- (4) Fortran と Lisp の処理系がなくなった。
- (5) C の処理系が MS-C から Turbo C(Ver.2)に変わった。Prolog の処理系が Prolog-KABA から RUN/PROLOG に変わった(使えるのは箱崎地区の講義室内だけ)。
- (6) 一太郎が Ver.3 から Ver.4 に変わった。Turbo Pascal が Ver.3 から Ver.5 に変わった。
- (7) 旧システムで D ドライブに入っていた一太郎は E ドライブに移った。Turbo Pascal などの言語処理系も全て E ドライブに入っている。D ドライブにはネットワーク接続用のソフトウェアが入っている。

端末室名\ソフトウェア名	一太郎	花子	Red 2	LOTUS 1-2-3	Turbo Pascal	Turbo C
講義室	○	×	○	×	○	○
オープン端末室	○	×	○	×	○	○
文系地区端局端末室	○	×	×	○	×	○
六本松地区端局端末室 B	○	2 台	○	×	○	○
病院地区端局端末室	○	×	×	12 台	×	○
農学部端局端末室	○	×	×	×	○	○

表 2: FMR-60HE1 で使用可能なソフトウェア

4. その他

- (1) 従来、パスワードは 1 文字以上 8 文字以下の英数字だったが、6 文字以上 8 文字以下の英数字に変更になった。短いパスワードをマークカードに記入した場合は、センター側で適当な英数字を末尾に付けることで対応する。
- (2) 各端末室の端末から利用できる OS を表 4 に示す。

端末室名\OS 名	MS-DOS	UNIX(SunOS)	MSP-EX
講義室	○	○	○
小講義室	×	○	×
オープン端末室	○	○	○
文系地区端局端末室	○	○	○
六本松地区端局端末室 A	○	×	×
六本松地区端局端末室 B	○	○	○
病院地区端局端末室	○	○	○
農学部端局端末室	○	○	○

表 3: 各端末室で利用できる OS の一覧

5. おわりに

旧システムと新システムの違いについて解説した。本解説では新システムで新たに導入された機能について触れなかったが、今後の広報で順次解説していく予定である。